

漢語条件句「遮莫」の日本漢文における受容——訓「さもあらばあれ」の影響はあるか

中山大輔（諏訪赤十字病院図書室）

漢語条件句「遮莫」は、中国において盛唐頃から用いられ始めた俗語とされており、本邦漢詩文においても、盛唐から百年ほど下の平安前期から用例が確認できる。また、遅くとも平安末期にはその訓みとして「さもあらばあれ」が見られ、以来ほぼ定訓化され、「遮莫」即ち「さもあらばあれ」として本邦では認知されてきた。ただ、「さもあらばあれ」は所謂訓読語ではなく、平安期に既存であった和語の定型句を訓に当てたものであり、漢語「遮莫」の本来持つ意味や機能とは若干の乖離があるとの指摘もある。その指摘に従えば、「さもあらばあれ」と訓むことにより、「遮莫」の解釈を誤ってしまう恐れも否定できないと考えられる。更に、特に定訓化以後、日本漢詩文における「遮莫」に、漢語本来の用法を離れ、訓「さもあらばあれ」の意味用法に従って用いられた、所謂和習的な用例が存在することも想定される。

本発表では、日本漢文における漢語「遮莫」の用法にそういった変遷が見られないかを確認するため、中国における用法との差異を検証した。結論として、主に本邦平安期までにおける「遮莫」は、中国例に準じた意味用法で用いられており、和習的な例は見られないことが確認できた。また、「遮莫」の用例を確認する中で、「さもあらばあれ」について、和文において用いられる語感とはやや差異が認められるものの、「遮莫」の訓に当てられることは詩文表現として適当であっただろう、との見解も提示する。唐代から用いられ始めた、中国においても目新しい俗語を、本邦人がいち早く受容し詩や文章に活用していた一事例として報告したい。

慶滋保胤の二首の詔をめぐって——「改元詔」と「令上封事詔」と

出口 誠（金沢学院大学）

慶滋保胤は、のちに内記入道と呼ばれたように、大内記としての活動が知られる。そして大内記の職務として起草した詔として、『本朝文粹』には永観元年から翌年にかけて起草した2首がとられている。本発表は、その2首（「改元詔」と「令上封事詔」）を精読することで、詔における内容と表現との関係性を探ろうとするものである。

「改元詔」は天元から永観への改元を命じるもので、初めに「休祥」・「災変」によって元号を改めるという改元の性質を説明したのち、今回が「災変」による改元であることを説く内容となっている。そのためか、改元にまつわる漢故事や経書をもとにした記述が目立つ。

一方で「令上封事詔」は、「水旱之災」などにより「倉廩已竭、田園自荒」になったとして、臣下に諫言を募るとする論旨である。ただし「令上封事詔」においては、意見封事

を募るにいたった事情の比重は軽い。両詔が1年余りしか隔たっていないことを考慮すれば、「改元詔」の言うところの「災変」という状況が大きく変わることはなかろうが、「改元詔」においては「災変」に重点が置かれていたところ、「令上封事詔」に至っては諫言に重点が移っていることになる。そして、この詔の特徴として『国語』および『白氏文集』の策林に多くを依拠していることが挙げられる。単なる表現を超えて、意見封事の効用というもっとも核心的な部分に、この両書を引用しているのである。

「令上封事詔」における白居易の策林からの引用は、みずからを「諫官」と称した白居易こそが、諫言を募るという趣旨によく合致すると考えたからであろう。そのうえで、紀伝道文人である慶滋保胤にとっては自然な発想であったことと、部分的ではあっても国家運営において白居易の思想が取り入れられた事例であることとを指摘する。

怪異と医学の狭間——中国と日本における「人が水と化す」説話

黄昱（こう いく／立正大学特任講師）

現代の学問体系では、超自然の現象や幽霊・化物にまつわる怪異譚と医学書は文学と医学と、人文科学と自然科学という対立の領域で捉えられがちであるが、古来中国では、病理や病名の解釈に怪異譚を引用したり、治療法として呪術的なものを用いたりすることが散見され、これら怪異の記録は所謂「科学」として認識される一面があった。

本発表は、中国と日本に伝わる「人が水と化す」話型の説話を取り上げ、中国では丹薬の知識として伝承されるこの説話が日本に伝来した後、怪異譚として文学の世界で展開してきた経緯を分析する。

永青文庫所蔵の『長谷雄草紙』絵巻の箱に貼られた書き付けには『庚辛玉冊』という書物を引用し、「透山根」という鉄を黄金にすることができ、人間が誤って飲むと紫色の水に化す薬草の逸話が記されている。また、蛇の腹の膨らみを解消する薬草を服用した人間が水となってしまったという説話も併せて書き記されている。『庚辛玉冊』は明の洪武帝朱元璋の十七男である朱権(一三七八～一四四八)の作で、練丹術に関する書物である。現在では佚書となっているが、『本草綱目』などの医学書に多く引用されている。この「人が水と化す」説話は、早くも宋代の筆記『春渚紀聞』「記丹薬」の巻に収録されており、中国における練丹術の一伝承として注目される。

一方、中世の日本において『長谷雄草紙』をはじめとする一連の説話に死骸から作った美女が水となって流れ去っていく話が見られるが、その由来については不明な点が多い。それに対して、近世以降、蛇の腹の膨らみを解消する薬草に関するこの中国説話は『一休閑東咄』をはじめとする江戸時代の笑話集や、落語の「蛇含草」「そば清」、さらに「とろかし草」に関する昔話として青森から鹿児島までかなり広い範囲で広まっていた。

このように、医学と文学の知のネットワークという視点で捉えると、医学知識としての

中国の怪異譚が日本に伝わり、笑話という娯楽を通して大衆に楽しまれ、通俗化していく経路に改めて注目する価値があるように思われる。

すべてこれたじょういっぺん
田上菊舎の「総是打成一片月白し」句について

——「一片雪」「一片月」「一片砧声」
李 夢幻（岡山大学大学院生）

菊舎が本格的に漢詩を作り始めた寛政九年（1797）、稿本『九国再遊墨摺山』において「きぬた打ける画題」をテーマに「総是打成一片月白し」句（以下「総是」句）を詠んだ。画題の「きぬた打ける」は「擣衣」、発句における「総是」、「一片月」は「擣衣」が詠まれた李白の有名な漢詩「子夜呉歌」に「総是玉関情」、「長安一片月」の句があって、それに由来することが即座に見て取れる。菊舎は画題の「きぬた打ける」から李白の「子夜呉歌」詩を連想し、画賛において李白詩の二つの語を借用して漢詩文調の一句を詠みあげた。

本発表は、菊舎の「総是」句における言葉ごとの典拠を追究し、「総是」句においてそれらがどのような働きをし、いかなる効果をもたらしているかについて考察する。

まず「打成一片」について、その用例は公案集『無門関』、『碧巖録』にある。江戸時代の『無門関』及び『碧巖録』の抄物における「打成一片」の意味を確認し、また、菊舎の同じ稿本における「打成一片」のもう一つの句例の詠みぶりと合わせて考察し、そして、菊舎の句における「打成一片」は『碧巖録』を踏まえたことを指摘して、この場合、月の光が「一片」となり、平等に限なく照らしていることを述べる。また、「打成一片」の「打」は「きぬた打ける画題」の「打」の動詞とも対応し、「子夜呉歌」の「万戸擣衣声」における万戸の砧声がひとつになるのを意味する。「声」が「一片」となる表現は宋、明代以後の漢詩によく見られる表現であるので、菊舎の句における宋、明の漢詩の影響も窺える。

最後に、「総是」句の座五「月白し」は蘇軾の『後赤壁賦』の「月白風清」の表現を踏まえ、風のイメージが「月白」に隠されていると指摘する。

以上を踏まえて、菊舎が漢詩や禅籍を踏まえて、相当複雑なイメージの重ね合わせを施した句作りに成功するだけの力量を備えていたことを明らかにしたい。